

人文科学とコンピュータの学際的研究とは

司会： 山田 奨治 (国際日本文化研究センター)
パネリスト： 八村 広三郎 (立命館大学)
竹田 正幸 (九州大学&科学技術振興財団さきがけ研究 21)
馬場 章 (東京大学)

人文科学とコンピュータ研究会が発足してから第 50 回目の研究会を迎えた。これまでの 12 年間の研究会の歩みを踏まえて、この分野の現状をどのように考えるのか、未来に向けてどのような研究を奨励し評価していくのか。これらの話題について、パネル討論をする。

What is the Inter-disciplinary Study of "Computers and the Humanities?"

Moderator: YAMADA Shoji, Internat'l Res. Center for Japanese Studies
Panelists: HACHIMURA Kozaburo, Ritsumeikan University
TAKEDA Masayuki, Kyushu University & PRESTO,
Japan Science and Technology Corp. (JST)
BABA Akira, The University of Tokyo

SIG "Computers and the Humanities" celebrates the 50th meeting. How do we consider the current status of our group, what kind of study should we encourage and evaluate for our future. We have a panel discussion on these topics.

人文科学とコンピュータ (CH) 研究会が発足してから 12 年が過ぎ、第 50 回の記念研究会を迎えるに到った。その間、じつに多くの研究発表がなされ、CH 研究会が主体となって論文誌での特集号が組まれたり、定期的にシンポジウムが開催されたりするに及んでいる。科学研究費特定領域研究「人文科学とコンピュータ」(1995-1998 年、代表：及川昭文氏) が CH 研究会での議論から生まれ、それが当分野の

底上げに多大な貢献をしたことはいうまでもない。

このように CH 研究会がさまざまな実績をあげてきたにもかかわらず、13 年目にしてなお「人文科学とコンピュータの学際的研究とは」という初々しいテーマのパネル討論をしなければならないことが、はからずも当分野の現状の一端を露呈している。すなわち、われわれはどのような研究を奨励し評価して

いくのかといった価値基準を明確化できていない。

その理由にはいろいろある。研究会発足当初は、人文科学にコンピュータをなんとか応用していく方法を模索していた。ところが、この12年間で人文系研究者をとりまくコンピュータ環境が劇的に変化してしまった。当分野の研究者が研究すべきテーマが、コンピュータ環境の変化の激しさに振り回されてきたともいえる。コンピュータ環境の変化の要点は、(1) パソコンの性能向上、(2) インターネットの登場、(3) データベース（とくにテキストデータ）の整備、の3点に集約されよう。これらの変化を受けてあらためて、われわれはいったい何がしたいのかを、あらためて問い直さなければならない。

CH研究会の現状は順風満帆ではない。CHの研究は情報科学研究のなかでは応用分野に位置する。応用分野の研究は、新技術の開発に絶対的価値を置く情報科学の中心的な研究分野からみれば周辺分野に過ぎない。一方の人文科学分野においては、コンピュータを使用した研究は不当に低く評価されているのが現状といわざるをえない。しかしCH研究会を取り巻くそのような現状よりもまず、われわれの内部においてどのような研究を進めていくべきかの議論を積むことが先決であろう。

そこで本パネル討論会の司会者の個人的見解に基づいて、CH研究会が掲げるべき価値基準のいくつかをあえて提案し、議論の火種としたい。

情報科学によって人文科学にあたらしい知見をもたらす研究が良い。しかし将来的にはそのような研究が、人文系学会のほうに吸収されることが望ましい。

現状の人文系学会を見渡してみても、コン

ピュータを使った研究を正面切って発表できる学会はそう多くはない。当面はCH研究会がそのような研究発表の場を提供していかなければならない。そしていずれは、CH研究会の存在理由がなくなるほどコンピュータを使うことが人文系の常識になることがCH研究会の活動目標なのであろう。

技術や方法は古くてもよい。逆に新技術を提案する場合は、その将来性・安定性をシビアに評価すること。

古い技術ほど安定しており、社会的評価が定まっている。人文系の真理探究の方法とするには、安定した方法でなくてはならない。情報処理屋は技術がほんの少しでもあたらしければ、無条件に評価する傾向がある。CH研究会ではそのような価値基準をとらず、むしろ新技術の提案にはいっそう厳しい評価を下すべきである。

データベースやコンテンツを作っただけでは駄目。その作成を通して新規の提案や知見があるかが問題。

研究である以上は、やはりオリジナリティが要求される。しかしデータベースやコンテンツをきちんと作ることはたいへんなことで、そのような業務に関わる研究者の評価をどのようにするべきなのだろうか。

そして最後に、われわれが取り組まなければならない、おおきな仕事がある。

人文科学と情報科学の両方を専門とする人材の育成を急ぐべし。

文学、歴史学、あるいは考古学などの人文科学を専門としながら情報科学にも専門的に習熟した研究者を養成していかなければならない。人文科学とコンピュータの融合は、おそらくそのような次世代の研究者にゆだねられるのだろう。

人文科学とコンピュータの課題

立命館大学 理工学部 情報学科
八村広三郎

1. 研究会のルーツ

本研究会のルーツは、1977年の民博（国立民族学博物館）の開館と民博へのコンピュータの設置にある。現在では博物館におけるコンピュータ利用は自明中の自明のことであるが、文科系の博物館でもあり研究所でもある機関に大型コンピュータシステムを導入し利用しようというのは、当時としてはきわめて異例で画期的なことであった。

民博へのコンピュータ導入の第一義的な目的は、資料の管理と資料情報のデータベース化にある。しかし、これにとどまらず、民博とコンピュータとの関係でさらに画期的なことは、研究博物館としての民博の中核である研究部に、「コンピュータ民族学」という研究部門が設置され、ここに情報科学を専攻する教官が配属されたことである。「コンピュータ民族学」は、コンピュータを単なる資料管理やデータベースのための道具としてとらえるだけでなく、コンピュータ的視点による民族学研究を行うという新しい試みであり、新しい学問領域を創造しようという博物館の意志の現れであった。

2. 研究会の目標

本研究会の目標について考えてみよう。まず思いつくおもなものは次のふたつである。

1) 情報科学の理論や情報処理技術を人文科学研究に応用すること。

2) 人文科学における情報の取り扱いを、情報科学、情報処理技術にフィードバックすること。

1) は、人文科学における各種のデータをコンピュータによる情報処理の対象にして、数量的かつ定量的解析を可能にすることや、情報科学における数理的・工学的な考え方を人文科学の研究対象にあてはめることにある。この場合は、どちらかというに「コンピュータ」が主であり、「人文科学」は従（受け身）となる。

コンピュータは自然科学や工学の分野から発生しこの分野で広く使われてきたこともあり、定式化・モデル化されたデータやシステムを主たる処理対象としてきた。ここでは、数値化ないしは記号化された情報が処理の対象になる。それに対して、人文科学領域では、多くの場合対象は定性的・個別的であり非定型的である。従来の情報処理は、このような対象に対しての経験が浅く、またこれらの処理はきわめて効率が悪くて困難なので、これらを対象として取り上げることが少なかった。

しかしながら、現実には我々の日常生活や家庭生活に目を向けてみる、これらの中で遭遇するデータや情報は、きわめて非定型的であり、個別的、状況依存的なものが多く、必ずしも従来型の情報処理で十分に対応できるものではない。つまり、人文科学分野だけが特別ということではなく、「人」を中心とする領域での情報はこのような共通の性質をもっている。今後、コンピュータが、「人」中心の情報処理へと対象を拡大していくとき、人文科学領域の情報処理は、格好のモデルケースともいえる。これが上記の2)に相当する。この場合、1)とは反対に、「人文科学」が主で、「コンピュータ」が従であるといえるだろう。90年代には、情報分野にも、「感性情報処理」や「リアルワールドコンピューティング」などの研究プロジェクトが立ち上がり注目を集めた。これらは、従来型の情報処理とは異なる、非定型・個別的な性質の情報処理を目標としたものであり、「人文科学とコンピュータ」と同質の問題意識によるものである。

1998年に、学術審議会は、「情報学研究の推進方策について」と題した建議をとりまとめている。

ここでは、「情報に関する学問は、情報科学や計算機科学に見られるように、計算の側面を中心とした学問体系として形成されてきた。しかし、近年、生命科学系や人文社会系との関わりが深くなってきており、今後は、従来の情報科学・計算機科学よりも広い視野で捉えていくことが重要である。」との認識を示し、今後、「長期的には、情報科学・計算機科学から人文社会系までの全ての学問を「情報」という視点から見直し体系化する「高次」の情報学とでも呼ぶべき学問の創設が期待される。」とも述べられている。これは、民博の創設時に「コンピュータ民族学」研究部門が構想していたものと同様のことを指していると考えられる。これを「人文科学とコンピュータ」にあてはめて考えてみると、それまでの、経験、直感、勘、伝承などに依存する度合いが高いと考えられていた人文科学（というよりも「人文学」）を、情報概念に基づく科学的手法により、人文科学として再構築することといいかえることもできる。これは、上術のふたつの目標に加える3つめの目標ということができる。

3. 研究会の到達点と課題

以上、「人文科学とコンピュータ」の3つの目標について述べたが、それでは、この12年の間に、そのような目標に基づいての成果や進歩がどの程度あったのか、われわれは何をしてきたのか、について考える必要がある。個々の研究について見ると、高く評価できるものを見出すことはできるが、それでは、それらが全体として学問研究のあり方や潮流を変えるような大きな動きとして昇華できたかという、十分に説得力のある答えを得ることが難しいのも事実である。

たしかに、この12年間に確実に底辺は広がってきている。しかしながら、これを、われわれの活動の成果と自負することができるのだろうか。パソコンが、日本語のほか、多くの言語を扱うのがあたりまえになり、また、マルチメディア処理により原資料のデジタル化と多角的な取り扱いが一般的になり、さらにインターネットでの情報交流が一般的になるなど、もはやコンピュータによる情報処理は特別なものではなくなった。これは人文科学領域でも同様であり、12年の研究会活動はこの世の中の動きをなぞっているだけで、実はわれわれが何もしなくてもこういう状況を達成できたのではないかとの見方もできる。

また、上記1)の部分に関連してのことであるが、人文科学領域へのコンピュータ利用にあたってして、情報技術のトップダウン的適用ないしは「押しつけ」という側面がなかったか反省する必要がある。トップダウン指向により促進された部分も、もちろん数多くあることは否定できない。しかし、トップダウン指向により、研究現場に過大の期待とその後の失望をもたらし、結局、情報離れを引き起こすという弊害も多かったのではないか。日本の情報技術レベルの高さは疑うべくもないが、果たしてその中身の情報、すなわちコンテンツは？と問う時、いささか心許ないものがある。技術システムの優秀さと比べて、日本のコンテンツの貧弱さ、あるいは、日本からの情報発信の少なさなどが大きな課題である。トップダウンの「ハコもの」先行スタイルではなく、まず手元の研究データに目を向け、これに対してコンピュータを道具として適用するというを前提にシステムを考えるとというボトムアップの視点を取りもどす必要があるのではなかろうか。

2003年度より、高校において科目「情報」が導入され必修化されることになっている。2006年度より大学に入学してくる学生諸君は、コンピュータの基礎的スキルと情報科学の基本的知識を身につけてくると期待される。これにより、人文科学の教育・研究においてもコンピュータを利用することが、当然のこととなるとも予想される。したがって、彼らが研究者として活動をはじめであろう2010年頃には、人文科学におけるコンピュータ利用の促進という、本研究会の一つの目的はすでに意味を持たなくなっていることも予想される。そのときに間に合うように、上で示したような、情報学による人文科学の再構築という第二の扉を開けるための準備の時期に来たといえるのではなかろうか。

人文科学と情報科学の学際的研究のために

竹田 正幸(九州大学 & 科学技術振興事業団さきがけ研究 21)

1 まえがき

「人文科学とコンピュータ」研究会が情報処理学会の研究会のひとつとして発足してから12年が経過した。人文科学分野において、研究者から敬遠されがちだったコンピュータ(計算機)を、もっと積極的に活用しよう、という当初の目的は、十分に達成されたのではないか。そこで、次なるステップにおいて重要課題となるのは何か、私見を述べたい。

「人文科学とコンピュータ」という名称において、「人文科学」は学問であるが、それと並置された「コンピュータ」はモノである。この並置の関係は、例えば「料理研究と電子レンジ」のそれに似ている。ここでは、情報科学という学問についての意識は希薄であり、したがって、情報科学に従事する研究者についても、単にツールを作成する技術者としてしか捉えられていない。海外に目を向ければ、Kluwer Academic Publishersから『Computers and the Humanities』という雑誌が刊行されているが、これも同様である。これに比べ、勉強社の雑誌『人文学と情報処理』においては、モノではなく「情報処理」という技術として捉えられている。しかし、「人文学」と並び立つ学問としては意識されていない。

このような認識は、10数年前の状況とその時点での課題が「人文科学におけるコンピュータ利用」であったことからすれば、むしろ自然であったかもしれない。筆者自身は、国文学の研究者と共同で研究を行い、1998年1月にはじめて当研究会で発表させていただいたが、その際、及川昭文氏から以下のようなコメントをいただいた。「あくまで人文科学の研究としておもしろい結果が出ることが重要なのに、情報の人間と一緒にやると、連中はツールを作ること自体がおもしろいものだから、問題がそれになってしまううまいかない。したがって情報の人間との共同研究は、やらない方がいい」と。筆者自身は、決してツールを作ること自体がおもしろいとは思っていない。が、当研究会に初期の段階から関わり、また文部省科学技術研究費補助金特定領域研究の領域代表者として「人文科学とコンピュータ」を立ち上げた及川氏であるだけに、実体験に基づくものとして筆者の心に重たく響いた。この方向での理想像は、「コンピュータに強い人文科学者」ということになろうか。

しかし、人文科学者だけの力で情報科学的手法を用いた研究を行うには、やはり限界がある。コンピュータ(の操作)には強くても、情報科学に強いわけではないから、当然である。「情報科学側の人間は、ただ人文科学者のいうとお

りのツールを作ってくれればいい」という考えに立つこともできるが、それでは情報科学的知見が反映されぬから、ろくなものにならない。また、「単なる人文科学者のお手伝い」と遇されることがわかっているのは、優秀な情報科学者は決して参入しないであろう。

聞くところによれば、当研究会では、人文科学者と情報科学者のうまいカップリングの事例がきわめて稀だそうである。そうだとすれば、これは「学際的研究」を阻む大きな障壁である。何よりもまず、人文科学者と情報科学者が対等の立場に立って共同研究を行うのでなければならない。また、その研究成果が、いずれか一方ではなく、それぞれの分野での研究業績につながるものが肝要である。

2 計算機科学とは?

「コンピュータサイエンス学会」という組織がある。その名称からはまったく想像を絶することだが、医療従事者による、コンピュータのハウツーを勉強するための勉強会のようなものである。会の趣旨は立派だが、これに計算機科学(Computer Science)と銘打つてあるのには、苦笑するほかない。しかし、これは、とりもなおさず、一般には、計算機科学が「コンピュータ」の陰に隠れてしまっているという実状を反映しているのではないか。とすれば、このような誤解は是非とも正しておきたいものだ。

コンピュータが通常の電気機器と大きく異なる点は、使用用途が特定されていないことである。このため、ワープロ、電子メール、ネットサーフィンなど、特定の目的にしか使用しない大多数のユーザにとっては、非常に使い勝手の悪いモノといえるが、その反面、「プログラムさえ書けば」様々なツールに化けるのである。計算機科学という学問は、計算機といういわば万能のツールに、何ができて何ができないか(計算可能性)、どのくらいの計算資源を要するか(計算量理論)、効率的な処理方式はどのようなものか(アルゴリズム論)について理論的に究明してきた。その目的は、計算機を人間の様々な活動に役立てることである。Aho, Hopcroft, Ullmanによる古典的名著『Data Structures and Algorithms』の第1章は、“1.1 From Problems to Programs”で始まるが、その冒頭には、“Half the battle is knowing what problem to solve.”とある。つまり、彼らは、問題解決の第1のステップとして、

(1) 問題の数学的定式化.

を挙げているのである。すなわち、現実世界で出くわす具体的な問題を計算機によって解決するためには、まず、その問題を適切な数学的モデルのもとで捉え、厳密に定義することが求められるのであって、アルゴリズムやデータ構造は、この(1)が済んだ後の話である、というわけだ。(1)以降のステップは、

(2) 計算可能性の解析.

(3) 計算量の解析.

(a) 手に負えない問題ならば、近似解など現実的解法へ。

(b) 効率的に解ける問題ならば、効率的アルゴリズムの開発へ。

となろうか。数学的によく定義された(well-defined)問題について、(2)(3)を論ずることは理論的興味をそそるが、定式化しにくい生の問題を相手にする際には、(1)での定式化こそが結果を大きく左右する。人文科学の問題を計算機で扱う際には、このことが特に重要であって、定式化がまずくはないか、常に注意を払っておかなければならない。そこで、

(4) 現実の問題への適用とその結果の検討。が必要である。すなわち、アルゴリズムを実働化し、問題に適用して得られた出力結果を検討し、必要に応じて(1)を修正し、問題の現実的側面をよりよく捉えた定式化を目指す。

理論計算機科学者の中には、(1)にはまったく触れずに、他人の定式化した問題ばかりを解いていく者もあるが、そればかりでは、先細りは目に見えている。

3 学際的研究を成功させるために

「人文科学の研究にコンピュータを使ってみました。こんなに便利でした」というだけでは、もはや価値がない。今後は、具体的な成果が掛け値なしに問われることになる。ここでの成果とは、「コンピュータを利用したこと」と切り離れた上で、なお、人文科学研究の成果として十分に評価できるものでなければならない。また同時に、情報科学分野においても新しい成果を生み出すことにつながって欲しい。このためには、両分野の垣根を超えた学際的な研究を推進することが強く望まれる。このパネル討論のタイトルには、「人文科学とコンピュータの学際的研究」とあるが、「学際的」というからには、「コンピュータ」側も学問として認識していただかなければならない。今後は、人文科学と情報科学という二つの自立した学問の学際的研究のあり方を探っていくことが課題となろう。

それでは、そのような学際的研究を成立させるには、何が必要であろうか。

学際的研究を阻む要因の一つとして看過できないのが、学際的研究に従事する研究者の置かれる立場の問題である。人文科学者で、研究にコンピュータを使っていると、それだけで異端視されかねないという状況がいまなお残る。また、情報科学者にしても、自然科学や社会科学ならまだしも、人文科学に手を出していると、色眼鏡で見られかねない。つまり、「学際的研究」「境界領域」などといえば聞こえはよいが、学問の「中心」ではなく「周縁」に位置するものとみなされる。それぞれの分野のはずれものが集まって隅っこで一緒にやっている、と言われかねない。これでは、両分野の優秀な人材は、めったなことでは参入できないから、学際的研究が健全に発展しよう筈がないではないか。

この問題の解決は簡単ではない。しかし、ハズレモノ扱いが厭ならば、「周縁」が「中心」に強い影響を与えることを実践して証明する以外になかろう。つまり、人文科学者と情報科学者が、それぞれ、「周縁」と「中心」の両方で業績をあげて見せ、しかも、その「中心」での業績が、「周縁」での共同研究と不可分に結びついていることを示すのである。筆者は、「周縁」こそが、新しい可能性を生み、「中心」に影響を与え、集団全体を活性化する力をもっている、と考えている。文化人類学で「中心と周縁」というときも、この2項の対立は静的なものではなく、動的なものとして捉えられている。また、霊長類研究で有名な河合雅雄氏の著作には、環境に適應している場合には進化がなく、ハナレザルのように適應異常を起こすサルが進化のきっかけになっていく、優位者が保守的であるのに対し、劣位者は優位者ができないもの、新しいものを発掘して、自分の世界を作っていく、という観察が記されている。

4 むすび

人文科学研究者は、あくまで、人文科学での研究成果によって評価されなければならない。研究手段として情報科学的手法を採りたいので、そのために学際的研究を行っている、という形が望ましい。一方、情報科学者は、人文科学研究の実際の場面で遭遇する問題の一つ一つを数学的に定式化し、それを解くアルゴリズムを与え、実装し、人文科学の専門家とともに結果を検討し、必要ならば問題の定式化に変更を加える。このような作業を繰り返すことにより、情報科学分野に、理論と実用の両面から、新しい研究課題を提供することにも繋がってゆく。このようにならない限り、人文科学と情報科学の学際的研究が健全な形で発展していくことは有り得ないと考えている。

人文科学から見た情報科学

馬場 章 東京大学大学院情報学環

概要 人文学と社会科学との双方における自然科学に対する親和性の違いに注目して、これまでの人文・社会科学と情報科学との関係を顧み、その反省をふまえて、これからの両者のコラボレーションのあり方を考える。

Informatics from the View Points of the Humanities and the Social Sciences

Akira BABA Interfaculty Initiative of Information Studies, the University of Tokyo

Abstract : I will take notice of the difference of affinity between the natural sciences and the humanities or the social sciences. Then I think back on the relationship and survey collaborations between informatics and the arts.

創立以来12年、第50回研究会を迎える「人文科学とコンピュータ研究会」では、人文学の呼称を用いずに人文科学と呼んでいる。しかし、文学・哲学・史学・語学などの人文学がはたして「科学」なのかどうか。自然科学や社会科学は、「科学」の名称を付して呼ぶことが一般的であるが、それに対して人文学を「科学」と呼ぶことに対しては、当の人文学研究者の間にも違和感や異論があるに違いない。「科学」とは何か、という問いに対する回答は、今日ますます困難になっているように思われるが、その端的な答えのひとつは、法則性の存在ないし認識ではないかと思う。そして、その法則性は、おそらく100パーセント数式で表現することが可能なのである。確かに人文学各分野においては、法則性の存在がほとんど意識されていない。もし法則的なものが存在したとしても、それを数式で表現することは困難な場合が多い。もちろん、人文学の分野でも法則の解明を目指している研究者もいるが、むしろ法則が存在しないことに人文学の人文学たる所以を主張する研究者もいる。

それに対して、法律学・政治学・経済学・心理学・社会学・教育学などのような社会科学では、人文学諸分野の研究よりもはるかに明確に「科学」が認識され、また、学問としての成立要因にも科学性が求められているように思われる。専門研究を一瞥しただけでも、そこには人文学とは異なる雰囲気を感じられるのである。

しかし、ここでは、人文学と社会科学の違い、あるいは、人文学や社会科学における科学性を主要な問題にしたいわけではない。むしろ人文・社会科学と総称される文科系諸学問とコンピュータとの関係、さらには文科系研究と情報科学との関係が重要である。なぜなら、すでに十数年来の事実が示すように、人文学であるか社会科学であるかにかかわらず、調査・研究そして成果の公開の各局面においてコンピュータの導入はいわば常識化しているからである。もはや、人文・社会科学の分野でもツールとしてのコンピュータ抜きの研究は考えられないと言っても過言ではないだろう。

それもかわらず、まず人文学と社会科学の違いにこだわったのは、研究におけるコンピュータの導入がたんにツールとしての利用にとどまるのか、あるいはさらに進んで、文科系諸学問と情報科学との積極的なコラボレーションにまで発展していくのかどうか、文科系諸学問の側の「科学」に対する親

和性の程度に依存しているように思えるからである。その親和性は理解度とも言い換えることができる。

文科系諸学問が科学であるか否か、そのいずれの立場に立つにしても、研究者が現代において研究を遂行する以上、研究方法には現代性を帯びざるをえない。研究の対象や資料には変化がなくとも、それらに迫る方法は現代的である。とりわけ文科系諸学問では大量の資料を取り扱うことが少なくないので、文科系諸学問に対するコンピュータの導入は、人文学研究者にとって便利なツールとして歓迎された。論文をワープロで書き、文献資料をデータベースで検索し、自分用の簡易データベースをつくることは、今日のほとんどの人文学・社会科学研究者が行っているであろう。そして、一部の研究者は、自己の研究成果を公表する手段として、大型のデータベースを提案し、ホームページを構築して、インターネットなどによる公開を進めているのである。

このように、人文・社会学研究者の間でのパーソナルコンピュータの普及率はかなり高いと思われるが、それにもかかわらず、とくに人文学研究者の情報科学に対する認識は依然として低いというのが現状ではないだろうか。かなり先進的にコンピュータを導入している場合でも然りである。その理由の第一は、人文学研究者としての教育訓練を受けてその分野での研究実績を積んできても、情報科学の知識を持ち合わせていないからである。人文学と情報科学との距離はあまりにも遠い。第二の理由は、データベースの構築を始めとして、電算機に関わる業務は大部分が外部の業者に発注すれば済んでしまうという現状があるからである。そして、第三の理由は、人文学の研究者が情報科学の研究者と共同で研究を進めていくという経験が未熟だからである。そこには、現在の大学や諸研究機関において共同研究の体制が確立していないという事情も反映している。したがって、人文学研究者の多くの場合、電算機に関わる業務は業者任せにしてしまって、人文学者の側でコンピュータを使ったら便利だろうな、というヒントは持っていて、なかなか情報科学の研究者との共同研究にまでは発展しにくいのではないかと思われる。

しかしながら、人文学と情報科学の研究者による先進的な共同研究が取り込まれつつあることも事実である。これらの貴重な体験から教訓を学び取り、問題点を明らかにしておくことは、今後の共同研究の推進において有益であると思われる。とくに、従来から「学際的」研究の重要性が叫ばれていながら、それが必ずしも成功していないことを考えると、文理の学際的共同研究の新たな開拓にも積極的に取り組む必要があると考える。

そもそも共同研究というからには、共通するテーマのもとに研究者おのこの個別の研究テーマなり役割分担を設定して進めるものであろう。そして研究というからには、何らかの斬新な創意工夫なり、新しい発見なり、前に一步でも進める成果が期待される。しかし、残念ながら現状は、コンテンツは人文学から技術は情報科学からという悪しき役割分担が固定されてしまっているように見える。人文学研究者の側には、素材とアイデアは出すけれども、そのあとは情報科学の方で宜しくという無責任さがあり、また、安易な丸投げ意識がある。仮に情報科学に丸投げしても、出来上がってきた成果物は再び人文学の側に投げ返されるのである。

この現状を克服するためには、人文学と情報科学との双方からの歩み寄りが必要であり、その結果としての学際的な情報人文科学（あるいは人文情報科学）ともいべき学問領域の確立が求められる。研究の分野を幅広く取って、研究方法のルールを制定し、研究成果の場所の確保が必要なのではないだろうか。瑣末な事例をあげれば、研究の過程における議論のルールあるいは研究成果を公開する論文の書き方や学会発表の仕方にも、文系分野と情報科学とは異なっており戸惑うことが多い。おそらく、そういう研究の瑣末な作法をも確認しながらコラボレーションが進むのだと思われる。もはや、「負んぶに抱っこ」の時代は終わらせなければならない。そして、そのようなコラボレーションの経験の蓄積こそが、人文学をはじめとする文科系諸学問が真に「科学」に脱皮する契機となるのではないだろうか。